地域の歴史を考える

千歳市史編さん委員会
会長　田端　宏
（道都大学教授）

一九七〇年代に道内の市町村史編さん、刊行に大きな盛り上がりがあったと見られています。開道百年とか、市町村の開設以来一〇〇年という地域が多くみられる時期になっていたことが関係するのだと思われますが、その年代から二〇～三〇年を経た二〇〇〇年前後は、またや目だった市町村史編さん、刊行の時期になっているようです。

前回の編さん、刊行からかなりの年月を経て新しい歴史事実が加わって来ていることのほか、古い年代の歴史についての見方が変わって来ていることが改めて市町村史を考える時期をもたらしているのです。ただ、近年のわが国の中央・地方の関係が大きく変動しようとしている情勢は、地域の歴史の重要性をあらためて感じさせるところがあります。

地方の時代というような言い方が流行したのは、七〇年代のことですが、バブル経済の崩壊後の現在は、かなり異質に、地方を重視しなければならない情勢にあることはあきらかで、中央も地方自治を大いに主導しているわけです。地方が自律的に経済と政治も発展させることができなくては、バブル崩壊後の再建がおぼつかない、というわけでしょう。

しかし、中央政治が現に実行しつつあることは、補助金の削減、地方交付税交付金の削減、したがって公共事業の縮小というような中央が地方のために支出する財政上の負担を削減するという点では明確、具体的に施策がすすめられているのに、中央の権限を地方へ移す、特に地方自治のために財源、徴税の権限を地方自治体へ移すための政策は、いかにも不十分なままである・・・と各地の自治体の長たちがなげいている有様が続いています。

こういう情勢なので、「南セントレア市問題」のようなことが起きます。愛知県の南知多町、美浜町が合併して、新しく市制をとり「南セントレア市」と称するようにするという予定が決められた、というニュースが広がると、地元はもとより、全国的に「嘲笑」の言葉が投げつけられた、地元の「中日新聞」によせられる意見はすべて、批判的なもので、賛意をしめしていたのは両町の合併協議会からよせられた意見、ただ一件だという有様となった。両町町民の合併そのものへの賛否投票が行われる、投票率は七〇％程、そのうち反対は七〇％程を占め、合併そのものが御破算となった、というのが「事件」の内容でした。

知多半島の地域は近世の沿岸航路の要衝で、大阪、名古屋、江戸をつなぐ千石船の基地のあるところでした。その歴史にともなう文化も、地域の人々の感情、意識も「南セントレア」とはあまりにも関係がうすかったようです。大都市近郊型の農業、そして漁業で発展しつつある町、と南知多町のホームページには書かれていました。

地方の活性化は地方の歴史、伝統、文化、地方住民の意識などに依拠してすすめるのは困難で、中央とか国際とかの力を借りるのが早道だとの考え方がとられる場合があり、それに対する根強い不満も存在するということがよくあらわれているのが「南セントレア市問題」だったのです。

道州制や市町村合併が、理念どおりに地方自治の実質、実力を充実させるためには、遠まわりでも地方の歴史、伝統、文化というようなものに土台をおく考え方をとらなくてはならないでしょう。

千歳市でも市史編さん委員会が発足しており（平成一六年一〇月）、既刊の『千歳市史』（昭和四四年）、『増補千歳市史』（昭和五八年）を参考にしながら検討を始め『新千歳市史』編さん基本計画をつくりあげようとしているところです。

一九世紀はじめに千歳とよばれるように上から（箱館奉行…江戸幕府の蝦夷地統治のための機関）定められた時、それまでシコツという地名で長年月、歴史、文化を重ねてきた人々がどのように感じたことかというようなことにも注意して新しい千歳市の歴史が編まれるようでなければならないでしょう。